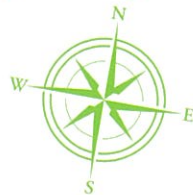


12泊13日、総全長100kmの
子供たちの軌跡がここに。

トレイル踏破を目指した

山を越え、自分を超える
一生忘れられない仲間と
一生忘れない13日間

MIYOKOチャレンジ 2018 [報告書]



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立妙高青少年自然の家

平成30年度 国立妙高青少年自然の家 教育事業
主催：独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家
後援：新潟県教育委員会 長野県教育委員会 妙高市教育委員会 上越市教育委員会 糸魚川市教育委員会

地図で見るMYOKOチャレンジ2018 100km踏破までの道のり

新潟県
Niigataken

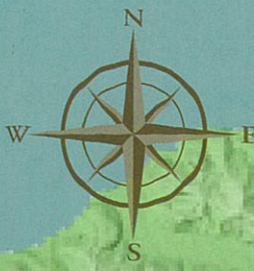
上越市
Joetsushi

十日町市
Tokamachishi

津南町
Tsunanmachi

飯山市
Iyamashi

長野県
Naganoken



7月29日(日)~8月1日(水)
出会うのステージ

8月8日(水)~8月10日(金)

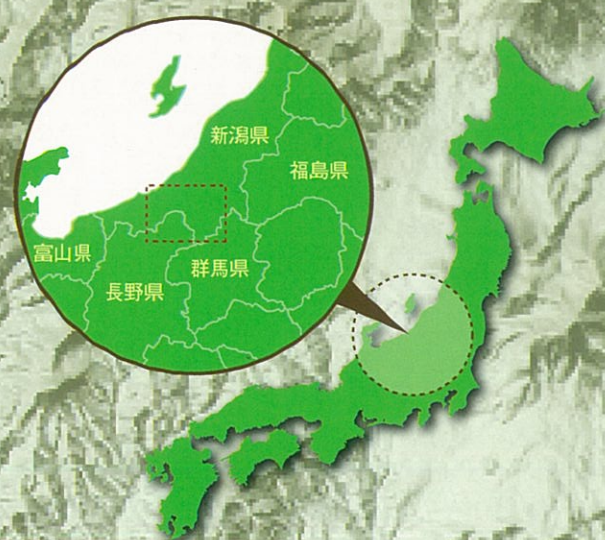
挑戦のステージ

8月2日(木)~4日(土)

協力のステージ

8月5日(日)~8月7日(火)

自立のステージ



概要

このキャンプは、子供たちが13日間という長期間をかけ、信越トレイル(全長80km)と火打山・妙高山の縦走を含む合計100kmの踏破を目指す統合型長期移動チャレンジキャンプである。自然への挑戦を通し、一人一人が違う個性をもつ仲間として、お互いに助け合ったり、自分の力でやり抜いたりして、ゴールを目指す。
「登山やキャンプなどに挑戦したい!」「自然体験に興味や関心がある!」「自分に自信をつけたい!」「悩みを解決するきっかけにしたい!」など、様々な思いをもった子供たちやいじめ・不登校・発達障害・ネット依存など、今日的課題のある子供を支援する事業でもある。

ねらい

このキャンプを通して、子供たちの「社会を生き抜く力」(当キャンプでは、「第2期教育振興基本計画」及び「新・機構元気プラン」をベースに「自立」「協働」「感謝」と捉えた。)を育成することをねらいとしている。

自立

自ら考え、的確に判断し、仲間と助け合いながらあきらめずにやり抜く力を育む。

感謝

自然や仲間とのかかわりを通して、共に活動する仲間や協力してくれた人、日常生活環境や家族への感謝の心を育む。

協働

仲間とのかかわりの中で、自らの役割を考えて果たし、互いに尊重し合いながら、支え合う態度を育む。

CONTENTS

- P. 1- 2 地図で見るMYOKOチャレンジ2018 100km踏破までの道のり
- P. 3- 4 準備・出会い・協力のステージ
- P. 5- 6 自立・挑戦のステージ
- P. 7- 8 MYOKOチャレンジ2018の成果① 個別の変容と考察
- P. 9-10 MYOKOチャレンジ2018の成果② 統合型キャンプの教育的効果
- P.11-12 MYOKOチャレンジ2018の成果③ 自立・協働・感謝はどのように高まっていくのか
- P.13-14 リーダーシップ尺度の結果と考察(2018)
- P.15-16 社会的スキルの結果と考察
- P.17-18 協力者へのインタビュー 謝辞
- P.19 お世話になった皆様 (運営協議会・後援・協力企業)・スタッフ紹介

- 期 日/
事前キャンプ 平成30年7月14日(土) ~7月15日(日) 1泊2日
本キャンプ 平成30年7月29日(日) ~8月10日(金) 12泊13日
- 参加者/
小学校5年生~中学校2年生までの18名 (概要に示す今日的課題のある参加者が数名)
- グループ編成/
6人1組
各グループにリーダーとサブリーダーのスタッフが1名ずつ
- 帯同スタッフ/
妙高青少年自然の家職員4名 学生スタッフ5名
スーパーバイザー兼臨床心理士1名
※この他、物資運搬などのサポートとして 自然の家職員が複数名

各ステージのようす

事前キャンプ・本キャンプ2週間前
準備のステージ

自立:本キャンプに向けて、必要な心構えや道具の準備を自分なりに考える。
協働:初めて知り合った仲間と様々な活動に取り組む。
感謝:様々な活動を通して、教えてくれたり助けてくれたりした人に感謝の気持ちをもつ。

強度・難度
中・低

主な活動内容

- 7/14(土)・オリエンテーション
・トレッキング
(自然の家オリエンティングコース)
- ・テント設営練習・シュラフ体験
・保護者面談(全員)
・参加者面談(希望者)

- 7/15(日)・野外炊事(カレー作り)

重点ポイント

- 子供と保護者の不安や心配を軽減し、本キャンプへの意欲を高める。
- 本キャンプで行う活動を実際に体験し、子供の特性やスキルを把握する。

トレッキングの基本姿勢

- 一人一人の様子や歩きを観察し、ケガがないように注意を促し、時にはサポートをする。
- スタッフがグループの先頭と最後尾を務める。

スタッフの基本姿勢

- ★子供たちの緊張が和らぐように、スタッフが積極的にかかわり、笑顔と受容的な態度で接する。
- ★活動を通して、様々な参加者とかかわり、個々の歩力や人とかかわり方、特性などの理解に努める。
- ★活動の基礎知識や技術などをわかりやすく丁寧に伝え、個々の経験や知識を把握しながら、ケガのないようにサポートする。
- ★開講式前の様子を見取る。



「自分たちで作ったカレーはやっぱりおいしい(^^)」

「テント設営がんばるぞー!」
「オー!」



「なるほど、あんな格好で歩くんだった。」

1~4日目
出会いのステージ

自立:キャンプ生活やトレッキングに必要な様々な知識、技術を身に付ける。
協働:グループに必要な役割を決めたり、自分の役割を果たしたりする。
感謝:助けたり助けられたりする経験を通して感謝の気持ちをもつ。

強度・難度
強・低

主な活動内容

- 7/29(日)・開会式
・個人目標設定
・野外炊事
・ミーティング
- 7/30(月)・信越トレイルスタート
(松之山登山口~伏野峠)
・野外炊事
・テント泊
- 7/31(火)・信越トレイル
(伏野峠
~光ヶ原高原キャンプ場)
・野外炊事
・テント泊
- 8/1(水)・自由時間
・びっくり野外炊事
・グループ目標設定
・プラネタリウム
(星のふるさと館)
・テント泊

重点ポイント

- 安心してキャンプを進められるように、全体の約束事や活動時のマナーづくり、受容的な雰囲気などキャンプの枠組みを作る。
- 個々の緊張を和らげ、グループ内でお互いのかかわりが生まれるようにする。

トレッキングの基本姿勢

- 一人一人の能力に配慮しながらも、ペース配分や休憩の取り方、地図やコンパスの使い方などを伝え、実践していく。
- トレッキングでは、個々の体力や体格差からくるケガや痛みなどに配慮する。
- スタッフがグループの先頭と最後尾を務める。
- エスケープルートで水分や補食の補給ができるようにする。

スタッフの基本姿勢

- ★野外炊事やテント設営などのキャンプ生活に必要な基礎知識や技術を伝え、手本となる。
- ★グループの振り返りや合意形成の場面では、お互いの考えや特性を尊重したり、前向きに捉えたりできるように、意図的にグループに介入する。
- ★声かけや振り返りノートを通して、受容的な態度で接し、一人一人の良い面に目を向ける。
- ★子供と一緒にルールやマナーを適宜確認し、参加者が理解できるようにする。
- ★用具の管理や活動の流れなど、参加者にとってわかりやすいように工夫する。
- ★危険行為や全体の約束を逸脱するなど、悪いことには毅然とした態度で対応する。
- ★振り返りでは、グループの状況に応じた課題やテーマにスポットを当てて行う。

▼「みんなで成功を祈願。いざ、信越トレイルへ!」



▲「へえ、この道を歩いていくんだ。」



▲「この矢印が信越トレイルのコースを示しているんだよ。迷ったらこれを見れば大丈夫!」

5~7日目
協力のステージ

自立:キャンプ生活やトレッキングなどで身に付けた知識や技術、失敗を生かして成功を重ね自信をつける。
協働:様々な活動を通して、グループの仲間とかかわり合い、他者を認め合いながら活動に取り組む。
感謝:「ありがとう」などの感謝の言葉を素直に相手に伝える。

強度・難度
中・中

主な活動内容

- 8/2(木)・信越トレイル
(光ヶ原高原キャンプ場
~とん平ゲレンデ)
・野外炊事
・テント泊
- 8/3(金)・信越トレイル
(とん平ゲレンデ~涌井)
・野外炊事
・テント泊
- 8/4(土)・千曲川メガサップツアー
・買い物
・オリジナル料理作り
・テント泊

重点ポイント

- 一人一人がグループの所属感をもてるようにする。
- 少しずつ、主体的に活動に取り組めるようにする。
- 慣れや個性が出始めることでトラブルが起こっても、心理的に脱落しないように支援する。

トレッキングの基本姿勢

- 出会いのステージでスタッフが実践していたことを、少しずつ子供たちに任せる。
- 疲れや慣れによって起こる危険行為やケガを予想しながら歩く。
- トラブルが起こりやすく、到着時間に差が生まれやすいので、連絡を密に行う。
- グループの実態に応じて、子供たちが先頭を歩く場面をつくる。
- エスケープルートのないルートがある場合は、装備や飲食物を余分に持たせる。

スタッフの基本姿勢

- ★衝突や対立、トラブルやケガ等が予想される時期なので、子供たちのかかわり方や体調をよく観察する。
- ★何か起こった際も、状況に応じて子供たちに任せ、見守る姿勢を大切にする。
- ★グループの一員としての役割を果たせるよう支援し、各場面で発揮される一人一人の良さに焦点を当てる。
- ★活動開始時や振り返り、意見の衝突が起こった時など、グループの目標や約束事を確認させながら、子供たちの主体的な解決を促す。
- ★振り返りノートや活動しながらの会話を通して、一人一人の心情や感じたことを引き出すようにする。



▲「これで涌井に到着。みんなで一緒に。せーの!」



「今日のルートは?」
「けこう歩くなあ...」



▲「見てみて。ここまで登ったよ。」



▲「えっ、なんでこんな所にキノコがひょっこりはん?」



▲「今日の辺まで来たの?」「ゴールは近いぞ!」



▲「みんな大丈夫?上がってこられるかなあ。」

千曲川でメガサップに挑戦。
息を合わせないとまっすぐに進まない。



8~10日目

自立のステージ

自立:活動の中で、自分が助けてほしいことを伝えたり、どのようにしたら問題が解決するかを考えたりすることができる。
協働:様々な活動を通して、自分らしさを出しながら、グループの中で合意形成を図る。(折り合いをつける)
感謝:共に活動している仲間へ感謝の気持ちをもつことができる。

強度・難度
中・高

主な活動内容

8/5(日)・信越トレイル(浦井~赤池)
・野外炊事
・テント泊

8/6(月)・信越トレイルゴール
(赤池~斑尾山)
・野外炊事
・テント泊

8/7(火)・クラフト
・登山準備
・野外炊事
・テント泊

重点ポイント

- 子供同士がお互いの理解を深め、お互いを認め、高め合えるようにする。
- グループとしてのまとまりを深めながら、一人一人の自分らしさを表現できるようにする。

トレッキングの基本姿勢

- ルート間違える可能性を予想しながら、グループを見守る。
- 今まで以上に時間がかかることが予想されるので、設定した最大到着時間に対する見通しをもちながらグループを見守る。
- エスケープルートでは、装備や飲料水を補給できるようにする。
- グループの様子を見取れる範囲で、先頭を子供たちに任せ、できる限り介入しない。

スタッフの基本姿勢

- ★集団のまとまりと個々の特性とのズレが意見の衝突やトラブルのもとになることがあるが、子供たちがグループの課題としてその問題をとらえ、グループで主体的な解決ができるよう支援する。
- ★グループで起こった問題をもとに、自分自身の課題に気付くことができるように、振り返りやノートのコメントを工夫する。
- ★振り返りの場面では、他者の良さや頑張りを目を向けるようにし、一人ひとりが他者から認められる経験をするようにする。

▼ 県境をまたいで、はいチーズ! イエーイ!!

▶ 今までの活動を振り返ってクラフト活動。「テーマはキャンプの思い出でしょ。」「どんなの作ろうか?」「何がいいかなあ。」



上:草のじゅうたん気持ちいいー
中:見て見て。クワガタ捕まえたよ。
下:この帽子似合うかな? 実はさっき見つけたキノコ



▼ 「ここ大変だったよね。」「坂が険しくて疲れたよ。」



自立のステージは自分たちで歩く。「この道あっているかな。」「きっと大丈夫!みんなで地図を確認したじゃん」

11~13日目

挑戦のステージ

自立:困難な状況においても、自分で考えたり、仲間と話し合いながらあきらめずに乗り越えていく。
協働:グループの中での自分の役割を理解し、その役割を果たす。また助けが必要な場面で適切に仲間を支援、互いに協力して活動に取り組む。
感謝:感謝の気持ちを伝えたい人を思い浮かべたり、言葉や文章で伝えたりする。

強度・難度
強・高

主な活動内容

8/ 8(水)・火打山登山
・家族からの手紙
・山小屋宿泊

8/ 9(木)・妙高山登山
・ゴールパーティー

8/10(金)・片付け
・まとめの時間
・閉会式



▲ 「お父さん、お母さんでこんなこと考えているんだ。」「返事なんて書こう。」

重点ポイント

- 自分以外の助けや支えによって生きていることを感じ、助け合いや支え合うことを実践できるようにする。
- 自信や自己肯定感を高めることができるようにする。
- 自分の考えや思いを主張することができるようにする。

トレッキングの基本姿勢

- 標高の高い山への挑戦となるため、子供たちの健康状態はその都度把握する。
- ガレ場やハンゴ、鎖場など経験のない登山道でのケガを想定した支援を行う。特に鎖場では、必要に応じて安全ロープを使用する。
- 危険箇所は、スタッフが安全確保する。
- 急な登り下りがあるので、3点支持やボールの使い方の見本を見せながら伝える。
- 全体の先頭と最後尾にスタッフを配置。各グループの先頭は、危険箇所においてはスタッフが先導する。

▼ 最後の夜、全員で13日間をふりかえる。

▼ 「山頂で飲むココアっておいしいね。」「あったかいし、甘いし、最高だよ。」



スタッフの基本姿勢

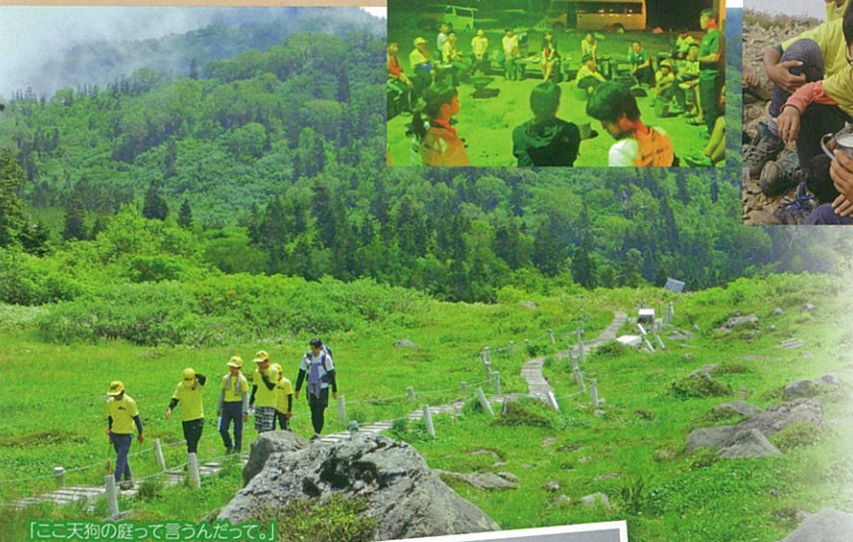
- ★子供たちの主体的な活動を見守る。
- ★危険な場面は適切に介入する。



▲ ロープにつかまって崖を登ったり、鎖につかまって斜面を横切ったり危険なところもがんばって歩きました。



閉会式の様子。保護者の前で思い出を語る。



「ここ天狗の庭って言うんだって。」



▲ 「やったー! ついにゴールだっ。」感動のゴール。100kmを踏破の瞬間。



「すごい! あっから太陽が昇っているよ。」



統合型キャンプの教育的効果

1 統合型キャンプとは

これからの社会を担う子供たちに必要な力として「社会を生き抜く力」が求められている。MYOKOチャレンジでは、その力を育成するために、「統合型キャンプ」を行っている。様々な個性や特性のある子供たちが共に12泊13日のキャンプ生活を過ごすことで、様々な成果があった。今年度は、発達障害や不登校等の課題を抱える子供の参加があり、それぞれどのような特徴的な成長があったのかアンケート結果を考察した。

2 参加者の成長

アンケートの結果を、各ステージの終了時とキャンプ1ヶ月後の合計6回実施し、その結果を統制群、課題群1(不登校傾向の子供)、課題群2(発達障害のある子供)の3つの群に分けて、平均の数値を比較検討した。1回目の7月15日、2回目の8月1日、6回目の9月の結果を比較し、増減の数値が大きかった2つの設問結果に注目した。

《アンケートの答え方》

- とてもよくあてはまる 5点
- あてはまる 4点
- どちらでもない 3点
- 当てはまらない 2点
- まったく当てはまらない 1点

① 不登校傾向の子供たちは、「先のことを考えて行動する力」が成長する

「先のことを考えて行動することができる」という設問では、特に課題群1の子供たちの数値が伸びていることが分かる。(表1)

不登校傾向の子供たちの多くは、他者とのかわり、集団での生活時間が少ないと思われる。実際に、MYOKOチャレンジに参加していた子供も、時々学校に行く、別室登校をしている等、他者や集団とのかわりが少なく、自分のペースで生活していることが聞き取りから分かっている。

しかし、MYOKOチャレンジでは、他者や集団に合わせた生活・活動となる。この体験の積み重ねが、「見通しをもつ」という思考につながり、数値が大きく伸びたと考えられる。

設問: 先のことを考えて行動することができる (表1)

	7月15日	8月1日	9月	増減
統制群	4.2	3.9	4.3	↑0.1
課題群1(不登校傾向)	3	3.25	4.67	↑1.67
課題群2(発達障害のある子供)	4.3	5	4.67	↑0.37

② 発達障害のある子供たちは、「感謝する心」が成長する

「私は、感謝したい相手をたくさん思いうかべることができます。」という設問では、統制群、課題群1の子供に比べて、課題群2の子供の数値が大きく伸びていることが分かる。(表2)

キャンプ中の発達障害のある子供に対する周りの子供の態度は厳しい。自己中心的と思われる言動が見られるからである。しかし、この厳しい態度は真正面から真剣にぶつかっていたと見ることができる。発達障害のある子供たちは、自分と他者の関係を強く意識し、「グループの一員」として仲間への「感謝」の感情が強く意識されたと思われる。

設問: 私は、感謝したい相手をたくさん思いうかべることができます。(表2)

	7月15日	8月1日	9月	増減
統制群	3.4	3.7	3.9	↑0.5
課題群1(不登校傾向)	3.5	3.75	3.67	↑0.17
課題群2(発達障害のある子供)	3	3.4	4	↑1.0

エピソード1

活動中、Aは自己中心的ととられるような言動で班員から反発を受けることが多かった。同じ班のBはある日の班の話合いの中で、「Aはどうしてそんなに速く先に歩くの? みんなのペースに合わせて!」と強い口調で話した。BはAの行動が理解できず認めることができない様子だった。それでもAは、班員たちとペースを合わせず、自分勝手と思われるような歩きを続け、班員との衝突が続いた。信越トレイルの最終日(9日目)午前中は班のペースで歩いたが、お昼に班員と衝突してしまう。Aは、今までになく、すぐに謝った。しかし、これまでのストレスがたまっていたのか班員がこれまでのAの言動についても追及し始めた。Aはすぐに謝ったのに許してもらえず、一人先に歩きゴールしてしまった。その日の話合いでBは「途中でAが約束を守れなくて、すぐ謝ったから成長できているのかもしれないけど、いっしょに歩くのは少し嫌だった。仕方ないけど…」と自分の気持ちを伝えた。Bはすぐに謝ることができたことを認めながらも、自分の心の中にある不満をもらしたのだった。この時、Aは黙って話を聞いていた。

歩く活動の最終日、これまで班の中でのトラブルはAの言動に集中しCもAのことを強く批判することが多かった。しかし、Cの足が痛くなったことをきっかけに自分勝手な言動をとり班の中がぎくしゃくしてしまう。夕食の時間になっても、Cと班員の雰囲気は解消されない。そんな雰囲気の中、Aは黙々と夕食を作る。Aは、Cのことも班員のことも責めたりする様子はない。グループの危機を何とかしようとしているかのような姿だった。

Aはキャンプ後に、料理教室に参加し、自分から声をかけて他の参加者と協力して料理を作ったり、家庭生活の中でも家族のお手伝いをするに「楽しい」と喜びを感じたりしているようである。また、感謝や反省の言葉が増えたり、すぐに言葉にして伝えるようになったりしている。



自立・協働・感謝は どのように高まっていくのか

MYOKOチャレンジにおける グループ活動

- 自立**: 自ら考え、的確に判断し、仲間と助け合いながらあきらめずにやり抜く
- 協働**: 仲間との関わり合いの中で、自らの役割を考えて果たし、互いに尊重し合いながら支え合う
- 感謝**: 自然や仲間との関わりを通して、共に活動する仲間や協力してくれた人、日常生活環境や家族への感謝の心を育む



- キーワード**
- キャンプ生活(テント泊・野外炊事・トレッキング)
 - 自分一人の力ではできない活動
 - 先入観のない人間関係
 - トラブルや感動的なできごと
 - 大自然

キャンプ生活においては、普段の家庭・学校生活にはない非日常的な体験をするため、多様な思考が必要とされ、その思考が言葉や行動として表れてくる。普段の生活では、自分の考えをくみとって接してくれる家族や学校の仲間がいない環境で、自らの考えを表現し仲間へ伝えながら行動しなければならないのである。さらにテント設営、トレッキング、野外炊事等のこれまで経験したことのない活動や課題解決の場面が多くあり、他者と協力しなければならない。子供たちは、このような環境の中で行われる「グループ活動」を通して、「自分と他者」「自分と集団」「自分と自分」と関わり合い、ステージごとに「自立」と「協働」の力をスパイラル(絡み合っ)て高めていくと考えられる。また「感謝」とは、このような関わり合いの中で起こる「できごと」を通して生まれてくる「感情(心の動き)」であり、その感情から「言葉」や「行動」として感謝が表面化されてくる。そして、グループ活動を通して得られた力は、その後の日常生活の中でも発揮されている。

(P.14 リーダーシップ尺度の結果と考察参照)



エピソード1 自分の提案を納得させるために表現し伝える

Aのグループは、体力的にトレッキングについていけないBがいたため、他の班より出発が遅くなったり、ベースが遅かったりしていた。この日も、Bが「歩くか、途中からみんなと歩くか、どうするか」なかなか決まらずにいた。グループのメンバーは、Bがスタッフと相談しているのを待ち、他のグループが歩く様子を見ていた。しばらくして、ようやく「出発!」の場面、Aは「斜面をまっすぐ登っていき」と提案する。他のグループに追いつくためにはどうしたらよいか考えていたのだ。この日のルートは、スキー場のゲレンデだった。他の班がゲレンデの蛇行したルートを書く様子を見て「まっすぐ登った方が近道だ」と提案したのだ。しかし、ここで「虫」が苦手なCが難色を示す。Aが提案したルートは草むらでその中には虫がいると思ったからだ。ようやく出発の場面で、またしても出発できない。Aは「自分が先頭を歩いて草を踏んで、虫を追い払う」などの提案をしてCを説得し始める。グループの仲間も意見を出し合う。結局、Cが妥協しみんなで草むらのゲレンデをまっすぐ登り始める。斜面を垂直に登るこのルートは、想像していたよりも苦しいルートだった。Cは虫への恐怖と闘いながら歩き、グループの仲間は、Cが歩きやすいように工夫したり、声を掛け合ったりして助け合いながら黙々と歩いた。

エピソード2 役割を見つけ協働する

Aは、このキャンプに参加するにあたって「まじめキャラ」でいこうと決めていた。普段の学校生活では、「面白くて優しい人」というイメージを持たれて、みんなをまとめようと頑張ってもなかなか聞いてもらえないと感じていたからだ。キャンプが始まると、Aはみんなをリードする前向きな姿が見られた。話し合っていて意見を出したり、積極的に夕食作りに取り組んだり、仲間への声掛けをするなどである。しかし、少し突っ走ってしまい、「他のグループよりも早くゴールしたい」という気持ちからみんなをせかせか言葉が出てしまったり、仲間と反発されたりするなど、グループの現状と自分の想いの中で起こる様々なトラブルやグループの仲間との衝突によって、苛立つ場面が度々あった。ある日、みんなでルートを確認して出発したが、ルートを間違えていることに気付かず数分歩いたことがあった。同じように間違えて先を歩いていた班が、引き返して来たところで自分たちの間違いに気が付いた。そこからは、他の班に遅れることなくリズムよく歩き、2番目にゴールしたのだ。Aはこの日の振り返りに「グループ以外の力を使ってしまったので悔しかった」と書いている。スタッフが活動を見守る自立のステージで、みんなをまとめ、グループを引っ張っていきかけたのに、うまくできなかったことが悔しかったのだろう。

歩く活動の最終日、妙高山登頂を目指し、雨の中苦しい登りが続く。Cが遅れながら必死に歩く。Aは、Cの歩くペースを気にしながら、歩みをとめて振り返り、「がんばれ~もう少しで山頂だ!」と励ましなが歩く。他の班よりも1時間近く遅い登頂だったが、達成感に満ちた表情だった。

Aの事例から グループを編成すると、リーダーを決めることがある。しかし、本キャンプではリーダーを決める場面はない。「13日間のキャンプ生活と100kmを踏破する」という同じ目的を持った仲間と、様々な活動を通して、それぞれの役割がうまれてくる。Aは、このグループにとっては、ムードメーカーであり、多くの声掛けでメンバーを支えていた。Aとグループの仲間たちは13日間のキャンプ生活を過ごす中で、「自立」「協働」を高めながら成長し、そして「感謝」の気持ちが湧き出てきたのだろう。

「嫌なことは上手にごまかしてしない」「言いたいことがあっても、言えなくて苛立つ」「都合が悪くなると何となく逃げていた」A。キャンプ後の生活では逃げない自分になっていた(本人と保護者のアンケートより)。Aはキャンプ後に「最高のキャンプだった。100kmもよく歩いたな。言葉に言い表せないよ仲間だった」「最高の仲間だった」と保護者に語っている。Aはキャンプ生活を通して、日常生活においても「自立」「協働」「感謝」を維持している。

リーダーシップ尺度の結果と考察(2018)

1 リーダーシップ尺度

三隅(1978)が提唱した「PM理論」を参考に、国立妙高青少年自然の家が平成23年に作成した「少年期のリーダーシップ測定尺度」を使用した。この尺度は、PM理論に基づき「課題達成(Performance)機能」と「集団維持(Maintenance)機能」を、5つの中位指標で構成した尺度である。

上位指標	中位指標=リーダーシップ尺度5つの力	下位指標
課題達成機能	困難に自ら立ち向かおうとする力	1 意欲・自立性
		2 危機意識
	計画的に考え行動する力	3 計画・判断
		4 省察・アクション
	情報を収集し、想像力をもって課題を解決しようとする力	5 情報収集
		6 想像力
集団維持機能	役割を意識し、集団の規範を守る力	7 役割意識
		8 規範意識
	集団内の人間関係を円滑にしようとする力	9 伝達・コミュニケーション能力
		10 ユーモア・明るさ

2 リーダーシップ尺度の分析結果から見た成果のポイント

★「自立のステージ」は、そのステージの特徴から、意見の主張が食い違ったり、ぶつかったりすることで、一時的に課題達成機能及び集団維持機能がともに停滞する。

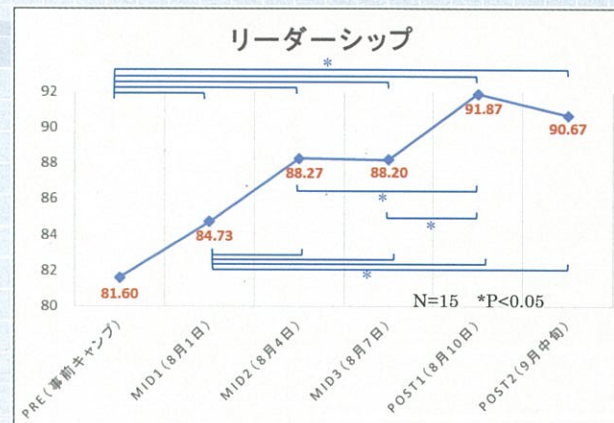
★「挑戦のステージ」を経て、特に集団維持機能が向上する。

3 リーダーシップ尺度の分析結果

MYOKOチャレンジ2018の参加者17名に対し、事前キャンプ時(PRE)、出会いのステージ終了後(MID1)、協力のステージ終了後(MID2)、自立のステージ終了後(MID3)、挑戦のステージ終了後(POST1)、事業終了1ヶ月後(POST2)に質問紙をつかって調査を実施した。なお、外れ値や記述の不備を除いた参加者15名を分析対象とした。分析は、調査時期を独立変数とし、リーダーシップ尺度を従属変数とする1要因5水準の参加者内計画における分散分析を行った。

1 リーダーシップ総得点の分析結果

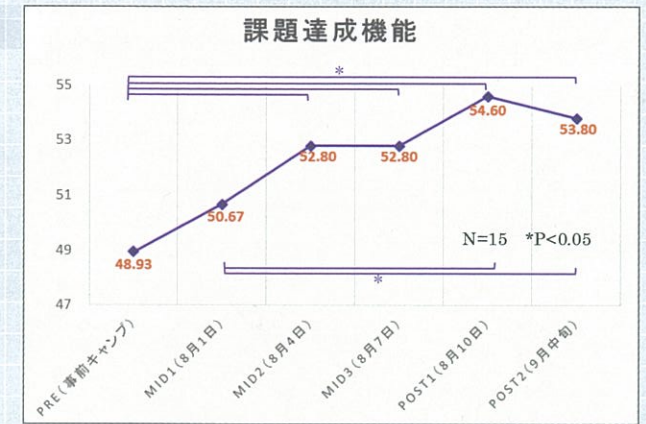
リーダーシップ尺度の総得点を分析した結果、時期の主効果が有意であった($F(5,14)=12.86, p<0.01$)。主効果が有意であったため、多重比較を行ったところ、PREに対しMID1、PRE及びMID1に対し、MID2、MID3、POST1、POST2の値が有意に高い値を示した。また、MID2及びMID3に対し、POST1の値が有意に高い値を示した($MSe=16.94, p<0.05$)。



2 上位指標の分析結果

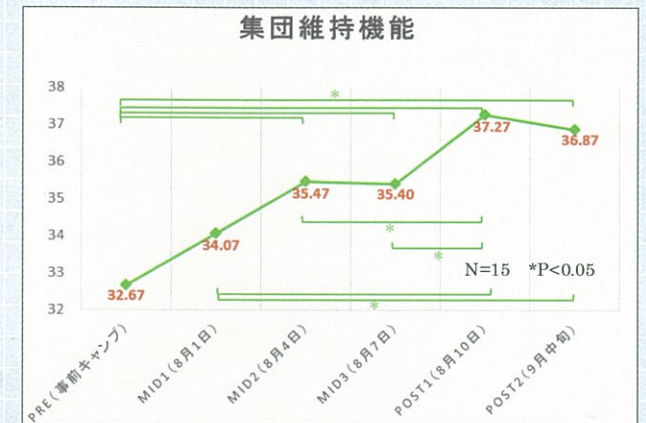
課題達成機能を分析した結果、時期の主効果が有意であった($F(5,14)=6.08, p<0.01$)。

主効果が有意であったため、多重比較を行ったところ、PREに対しMID2、MID3、POST1、POST2の値が有意に高い値を示した。また、MID1に対し、POST1、POST2の値が有意に高い値を示した($MSe=10.88, p<0.05$)。



集団維持機能を分析した結果、時期の主効果が有意であった($F(5,14)=10.08, p<0.01$)。

主効果が有意であったため、多重比較を行ったところ、PREに対しMID2、MID3、POST1、POST2の値が有意に高い値を示した。また、MID1に対し、POST1、POST2の値が有意に高い値を示した。さらに、MID2及びMID3に対し、POST1の値が有意に高い値を示した($MSe=4.41, p<0.05$)。



3 考察

★「自立のステージ」では、一時的に課題達成機能及び集団維持機能がともに停滞する

MYOKOチャレンジにおける5つのステージは、それぞれに特徴がある。特に「自立のステージ」は、グループの主体的な活動が中心となり、集団のまとまりと個々の特性とのズレが意見の衝突、対立といったグループの課題が表出する。その後、一時的にグループが停滞することが予想された。実際に「MYOKOチャレンジ2018」においても、そのような参加者の姿が見られた。

★「挑戦のステージ」を経て、特に集団維持機能が向上する

グループの停滞の後、「挑戦のステージ」を経て、特に集団維持機能が向上する。これは、火打山・妙高山の縦走登山という、困難なフィールドに立ち向かう中で、仲間の大切さや、支えられている実感を得ることで、グループの結束が高まったと考えられる。「自立のステージ」の一時的な停滞状況からの変化であり、MYOKOチャレンジにおける、「挑戦のステージ」が「自立のステージ」と連動し、得られた結果だと言える。

分析 国立妙高青少年自然の家 及川 未希生

社会的スキルの結果と考察

社会的スキルの分析結果から見たポイント

キャンプによって、全般的な社会スキルが向上した
特に「関係参加行動」の因子、すなわち積極的に人間関係を作るスキルが向上した

MYOKOチャレンジ2018では、少年期のリーダーシップ尺度の他に、筑波大学野外運動研究室の協力を得て、参加者の社会的スキルについても調査を実施した。

調査の概要

キャンプに参加した子どもたちの社会性の変化を明らかにするために、戸ヶ崎・坂野(1997)が作成した社会的スキル尺度を一部修正し測定に用いた。社会的スキル尺度は、適切な仲間関係を形成し、維持し、向上させる社会的行動に関する3因子21項目からなる質問紙である。質問紙は、質問項目に対して「ぜん

ぜんそうでない(1点)~「いつもそうだ(4点)」の4件法で評価を求めた。

調査は、事前キャンプ(Pre:7月14日)、閉会式(Post1:8月10日)、キャンプ終了1ヶ月後(Post2:9月中旬)の合計3回行った。

社会的スキル尺度質問項目一覧

関係参加行動

- 友達と離れてひとりで遊ぶ(※)
- 遊んでいる友達の中に入ろうとしても、なかなか入れない(※)
- 友達の遊びをじっと見ていることが多い(※)
- 自由時間に友達とあまりおしゃべりしない(※)
- 友達にあまり話しかけない(※)
- 話しかけようとして、ドキドキする(※)
- 友達に気軽に話しかける

関係向上行動

- 友達が失敗したら励ましてあげる
- 困っている友達を助けてあげる
- 相手の気持ちを考えて話す
- 引き受けたことは最後までやり通す
- 自分に親切にしてくれる友達には、親切にしてあげる
- 友達の意見に反対するときは、きちんとその理由を言う
- 友達の頼みをよく聞いてあげる

関係維持行動

- よく友達の邪魔をする(※)
- なんでも他の人のせいにする(※)
- 人をおどかしたり、いばったりする(※)
- 友達にけんかをしかける(※)
- 自分のしてほしいことを、わりやりに友達にさせる(※)
- 友達の欠点や失敗をよく言う(※)
- 間違いがあっても素直に謝らない(※)

※は反転項目

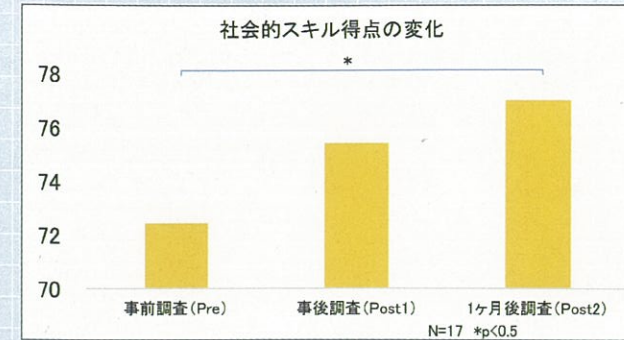
結果

まず、社会的スキル尺度の全体得点について、一要因の分散分析を行った(表1)。その結果、5%水準で有意であった。多重比較の結果、事前キャンプ(Pre)よりも、キャンプ終了1ヶ月後(Post2)の得点が有意に高かった。このことからMYOKOチャレンジ2018の参加者は、キャンプ終了後1ヶ月において社会的スキルが向上したと言える。

次に、因子毎に得点を算出し、時期における得点の変化について一要因の分散分析を行った(表2~4)。その結果、関係参加行動においては、5%水準で有意差が認められた(表2)。多重比較の結果、事前キャンプ(Pre)よりも、閉会式(Post1)の得点が有意に高かったが、キャンプ終了1ヶ月後(Post2)は有意差が認め

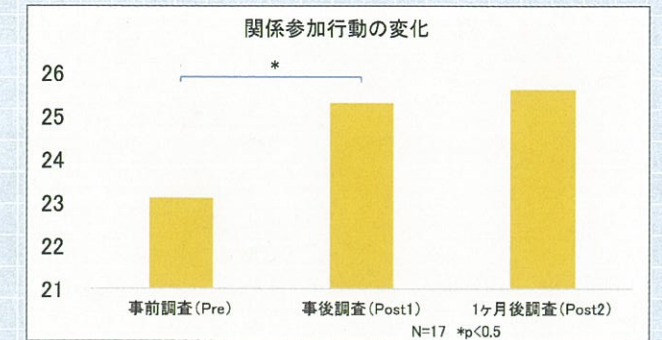
られなかった。関係向上行動では、5%水準で有意差が認められた(表3)。多重比較の結果、事前キャンプ(Pre)よりも、閉会式(Post1)、キャンプ終了1ヶ月後(Post2)において有意な向上が認められた。また、関係維持行動においては、有意傾向が認められた(表4)。多重比較の結果、閉会式(Post1)よりも、キャンプ終了1ヶ月後(Post2)に有意な向上が認められたものの、事前キャンプ(Pre)との間には、有意な向上は確認できなかった。

このことから、MYOKOチャレンジ2018の参加者は、社会的スキルの3因子のうち、関係参加行動、関係向上行動に関するスキルが向上したと言える。



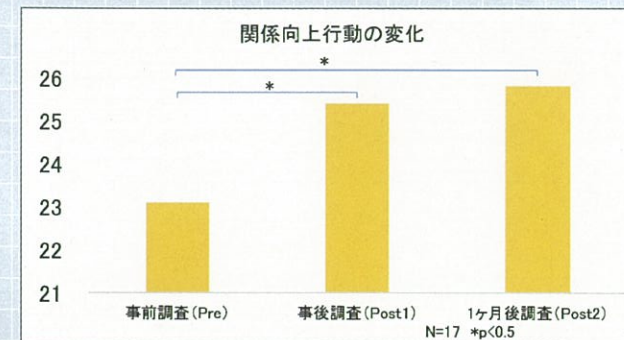
Pre		Post1		Post2		F
M	SD	M	SD	M	SD	
72.4	6.29	75.4	6.62	77.0	6.62	4.74*

Pre<Post2 *p<.05



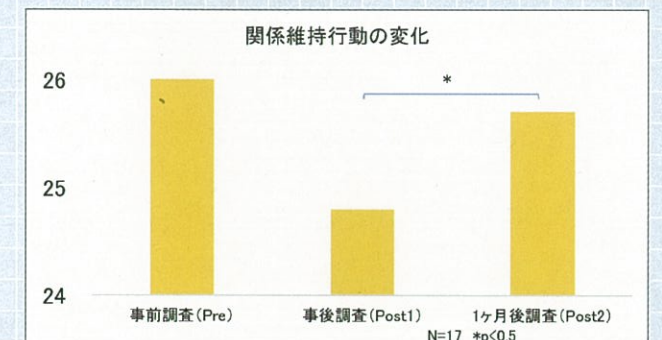
Pre		Post1		Post2		F
M	SD	M	SD	M	SD	
23.1	4.21	25.3	3.28	25.6	3.86	3.96*

Pre<Post1 *p<.05



Pre		Post1		Post2		F
M	SD	M	SD	M	SD	
23.1	4.01	25.4	3.08	25.8	2.38	5.86*

Pre<Post1, Post2 *p<.05



Pre		Post1		Post2		F
M	SD	M	SD	M	SD	
26.2	1.47	24.8	3.28	25.7	2.87	3.06†

Post1<Post2 †p<.10

まとめ

以上の結果より、MYOKOチャレンジ2018の参加者は13日間のキャンプにおいて、社会的スキルを向上させたと言える。また、社会的スキル尺度においては、関係形成(参加)、関係向上、関係維持の3因子からなるが、キャンプでは、関係形成に関する「関係参加行動」と「関係向上行動」の2因子の行動スキルの獲得が顕著であった。すなわち、キャンプにおいて参加者は、積極的に人間関係を作るスキルとその関係を向上させようとするスキルを向上させたと言える。しかしながら、関係維持のスキル向上は認められなかった。これは、もともと関係維持因子の事前キャンプ時の得点が高い(いずれも1項目の平均が3点以上)ため、有意差が認められるまでには向上しなかったことが推察される。また、関係維持行動の得点は、キャンプ前からキャンプ終了時において(有意差はないが)低下を示したのは、キャンプにおいて、様々な活動しながらグループで意見をぶつけ合うなど、日常よりも本音での関わりが増え、関係維持行動に関する項目の評価が低下したことが推測される。

キャンプは24時間を他の参加者と共にするグループ活動であり、おのずから人間関係を円滑にすることが求められる。朝起きてから、夜寝るまでの多くの時間において、他者と折り合いをつけて活動を進めていかなければならない。今回は、関係参加行動、関係向上行動の質問項目に含まれているようなグループの話し合いに積極的に参加し、自分の意見を述べることや、グループの仲間に話しかける、あるいは、活動中に友だちを励ます、相手の気持ちを考えて話すなどの力を身につけたことが特徴であったと言える。MYOKOチャレンジは、トレイルを踏破するという大きな目標のあるプログラムであるが、目標達成にグループで挑戦するということが参加者の社会的スキルを向上させる要因となっていたと考えられる。

筑波大学教授 坂本 昭裕氏

協力者へのインタビュー

4年目を迎えた「MYOKOチャレンジ2018」。1回目からキャンプに帯同し、助言をいただいている、筑波大学教授 坂本昭裕氏と、今年度キャンプのカウンセラーとして参加してくれた坂本先生のゼミ生である前川真生子氏、小西諒氏にお話を伺った。

■ 事前キャンプについて

坂本: 事前キャンプは、本キャンプに向けての練習、参加する子供の理解が主な目的となっています。おおむねこの目的を達成する内容になっていたと思います。

ただ、かつては坪岳、藤巻山での歩きの様子を見ており、比較的、子供の体力の様子を端的に理解することができました。今回は例年より近場で平坦なオリエンテーリングコースだったため、もう少しかつてのような登り下りがあるコースでもよかったと思います。そうした方が子供の力を確かめやすかったかもしれません。

小西: テント設営の練習時や野外炊事、ほとんどの活動に保護者の方が一緒にいました。保護者がいると、保護者がいない時の子供の姿を見ることができません。

しかし一方で、親子の関係を見ることができるといふメリットもあります。プログラムごとに保護者が同行する、しないの場面を分け、意図的に子供の姿、保護者との関係を見える場面を設定していくと思います。

■ 休日について

前川: 10日目の休日では、昨年のバナナボートから、ネイ



▲左より小西諒氏、坂本昭裕氏、前川真生子氏

チャークラブづくりに変更になりました。グループの仲間が自然と集まり、会話が生まれるなど、いい雰囲気が出来ていたと思います。歩きのある日のタイトな時間設定とは対照的に、ゆったりとした時間が流れ、モードの変わる活動を行うのはいいと感じました。クラブに関しては、グループの仲間で作るのもよかったですが、一人ひとり作ってもよかったかもしれません。

坂本: グループでやることと個人でやることには、双方長短があります。グループですと、みんなで行うので、細かい作業が苦手な子も出来上がりは満足感を得ることができます。個人なら自分の思い通りのものを作ることができますね。

また、ここまでの振り返りを入れたいというねらいであったなら、コラージュ的なものでもよかったかもしれません。また評価のことを考えると自然の家に持ち帰ることができるようなものを検討してもいいでしょう。

■ プログラムの改善

坂本: 現行のMYOKOチャレンジの中で改良とするならば、自立のステージの部分かと思います。どういった歩き方が自立かを考えた上で、もう少し子供たち自身が「自分たちで

歩いた」ということを感じられるようにしていけるのではないかと思います。完全に子供たちだけに任せることは、なかなか難しいですが、今よりもさらに、心理的な安心感の「ない」環境を作れないでしょうか。これは冒険教育の中では、主観的なリスクと客観的なリスクというんですが、参加している人にとってはハラハラどきどき、大人からすると安心感のあるもので、参加者は乗り越えることができるであろう、という見通しをもった課題の与え方ができないかと考えます。

ただ、プログラムというのは子供たちとの関係の中でしか進められないので、グループの状態や一人一人の子供たちの実態を把握し、ある程度のふり幅をもちながら難易度の段階を変えることが大切です。

大学生のプログラムの例を挙げると「1泊を含めた2日間の中で、この区間を歩いてみよう」というような設定の仕方があります。指導者は基本的に口を出さず、安全管理を行う。ただ、この1泊を含めた2日間の歩きを子供たちに任せる。今のプログラムでは、泊に関しては、全員が一緒です。もちろん安全管理上の問題はクリアした上で、1泊ぐらいは、それぞれのグループで異なる場所にテントを張るのもいいと思います。

また今回「同じグループの人と同じテントに泊まりたくない」というようなグループの関係のトラブルがありました。しかし、他のグループはいない、生きるためには、同じグループの人と寝るしかない、というような、そうせざるをえないという状況がある意味教育的な効果を生むこともあるかもしれません。

謝辞

MYOKOチャレンジが終了して2か月後、秋の感謝祭に、キャンプ参加者の一人(小学6年生のK君)が久しぶりに元気な顔を見せてくれました。「夏休みの宿題で書いた作文が賞を取ったんだよ」と照れくさそうに報告をするK君に、「その作文、是非、自然の家にも送って!」とお願いをしました。

K君の作文は、山口県で行方不明になった男児を救助した尾島春夫さんの新聞記事を題材にしてありました。「他人のために動く尾島さんを手本にしたい」というK君の気持ちがあふれる素晴らしい作品でした。また、K君は、「勉強も大切だけど、人との関わりはもっと大切と感じた」とも書いていました。

キャンプ中には、仲間とのトラブルや互いの心を通わせる出来事など、17名がチームとなる様々な体験がありました。「仲間との様々な体験」と「豊かな自然」そして「豊富な時間」が折り合って、子どもたちにもスタッフにも「大きな感動」をもたらせてくれました。K君の作文にも、その感動がギュッと詰め込められている、そう感じられました。

さて、私たちは、インクルーシブな教育キャンプ(統合型キャンプ)、つまり参加してくれる全ての子供たちにとって一人一人が最大限自分の力を発揮できるようにすると共に、

■ 指導体制について

坂本: キャンプカウンセリングの考え方をスタッフみんなで共有してやっているのは大変素晴らしいことです。発達障害のある子供たちを抱えながらなかなかこれだけのキャンプは出来ないと思います。

また発達障害の子を、教育経験の乏しい大学院生が関わっていくのはとても難しいことです。指導現場で必要以上に感情を引き出されるなど辛そうな時もありましたが、それでも子供を否定せず見守りながらキャンプを進めていました。若いカウンセラーと、経験のある施設の職員の方が上手にバランスをとってグループの指導にあたっていることがよかったと思います。このような指導の考え方と枠組みがしっかりとあるということが大切だと思います。

日本の青少年教育施設の中で、これだけ手厚い指導をしているところはなかなかないのではないかと思います。苦勞ももちろん多いですが、キャンプ最終日に参加者を笑顔で迎える親御さんの様子を見ていると、本当に意味のあるキャンプだとしみじみ感じます。



お互いの関係性の中で一人一人が成長できるキャンプを目指して4年間取り組んでまいりました。体験活動のユニバーサルデザイン化として、キャンプの構造化や、各種のキャンプスタッフのかかり方などを開発し、その効果などを検証してまいりました。皆様のご批評を賜りたくお願い申し上げます。

このキャンプを企画・運営・評価するに当たって、国立妙高青少年自然の家運営協議会委員で妙高市教育委員会顧問の濁川明男先生、信州大学副学長の平野吉直先生、4年間、本キャンプの全てに帯同していただきスーパーバイザーとしてご指導いただきました筑波大学教授で臨床心理士の坂本昭裕先生はじめ委員の皆様、信越トレイルクラブの大西宏史様など実にご大勢の方々から多大なるご指導・ご支援を賜りました。また、本事業を実施するにあたり、関係機関・団体・企業の皆様から多くのご支援・ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

国立妙高青少年自然の家 所長 星野 浩一



7月29日(出発日)

8月10日(到着日)

MYOKOチャレンジ 2018 [報告書]

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立妙高青少年自然の家

お世話になった皆様

MYOKOチャレンジ2018のために、たくさんの関係機関や団体・企業の皆様よりご協力や協賛をいただきました。皆様からの温かいご支援のおかげで事業が充実し、無事に終了することができました。本当にありがとうございました。

国立妙高青少年自然の家運営協議会

MYOKOチャレンジ2018運営委員会 兼 国立妙高青少年自然の家運営協議会運営委員
平野 吉直(信州大学理事・副学長)
坂本 昭裕(筑波大学体育系教授 臨床心理士)
長野 康之(国際アウトドア専門学校教務部長)

後援

新潟県教育委員会／長野県教育委員会／妙高市教育委員会／
上越市教育委員会／糸魚川市教育委員会

協力企業(五十音順)

株式会社 伊藤園 上越営業所／WEST上越店／休暇村妙高 笹ヶ峰キャンプ場／
株式会社 キュービットバレイ雪だるま高原／コカ・コーラボトラーズ ジャパン株式会社／
高谷池ヒュッテ／四季彩の宿 かのえ／上越清里星のふるさと館／
NPO法人信越トレイルクラブ／スーパースポーツゼビオ上越店／大蔵寺高原キャンプ場／
戸狩観光協会／(株)橋詰商会／POWERDRIVE R117／
光ヶ原高原グリーンバル高原荘・キャンプ場／斑尾高原ホテル・スキー場／山田損保事務所／
有限会社 湯米心まつのやま ばーどがーでん／雪だるま温泉 雪の湯／あしんの里 やすらぎ荘

MYOKOチャレンジ2018スタッフ

- スーパーバイザー
坂本 昭裕(筑波大学教授)
- キャンプディレクター
宇佐美 崇
- マネジメントディレクター
田原 朋子
- [1班] ● リーダー
東 千香子
● サブリーダー
小西 諒(筑波大学院生)
- [2班] ● リーダー
竹内 政仁
● サブリーダー
五十嵐 あゆみ(新潟青陵大学学部生)
- [3班] ● リーダー
前川 真生子(筑波大学院生)
● サブリーダー
福畑 皓生(信州大学院生)
- マネジメントスタッフ
村井 佑太
(国際自然環境アウトドア専門学校生)

平成30年度 国立妙高青少年自然の家職員

- 所長 星野 浩一
- 次長 桑山 宗大
- 主任企画指導専門職 … 田原 朋子
- 企画指導専門職 …… 福上 英彦
宇佐美 崇
市川 哲
水野 敏明
- 企画指導専門職付 …… 及川 未希生
- 事業推進係長 …… 安原 覚
- 事業推進専門職 …… 竹内 政仁
斎藤 晃
- 事業推進係 …… 東 千香子
内田 百合子
小嶋 武
市ノ澤 美羽
望月 こずえ
- 総務係長 …… 志賀 和孝
高波 聡美
- 総務係 …… 草間 祐太
今井 一昭
- 管理係長 …… 村椿 和之
- 管理係 …… 山崎 和美
岡田 幸子
- 学生サポーター …… 西澤 将大
若槻 朱美
山田 正敏

平成30年度 教育事業報告書

MYOKOチャレンジ2018 ～山を越え、自分を超越る。一生忘れられない仲間と一生忘れない13日間～

発行日 平成31年3月

編集・発行者 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

印刷所 株式会社 桐朋

お問い合わせ／独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2

TEL 0255-82-4321【担当 宇佐美・田原】 FAX 0255-82-4325

URL <https://myoko.niye.go.jp/>

